

瘡痕：詩歌

著者	春秋
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 2
ページ	9 2 - 9 2
発行年	1913-11-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/6298

われとよく争ふ妹我が居間にさうび持ち來ぬ秋立ちければ
うす黄なるほふらそよがり秋立ちし病院うらの濱の夕日に

瘡 痕

永劫に癒わがたき胸の瘡痕よつとめはげみて唯なくさめむ
男の子われあゝこの度はこの夏はかならず人に勝たむと思ふ

春 秋

ついで、ついで、こんぼ

鏘 乎

月夜涼み場満ち潮サラと遠淺に
萎み葉に飛ばぬ蟬のあり遠雷す
旱り野路を遠埃する管笠が
今日もく雨待ち宵を蚊食鳥
遠のき雷ひき水音冴に青嵐
醫師呼ぶと町へ夜人力車を稻妻す
火に識りし谷間の家もきりくす

よな、白き草を秋風山下りに
店に聞く琵琶など温泉宿秋たちて
霧裂けて放し飼牛の裾野廣口
乳母歸ると泣く子を蜻蛉秋晴れに
落ち釣瓶探朝る寒を姉病めり
大悟の朝雁來紅に月淡し
折詰もふらと濠沿ひ天の川
遠乗馬水かふ萩に魚影して
小春祭日障子張る日椽病後に